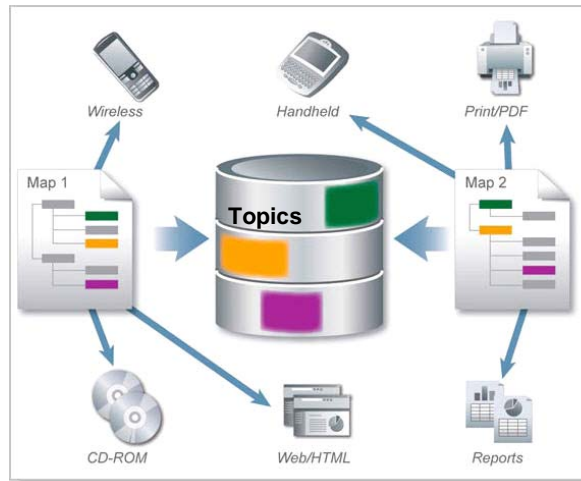
製造業においては、製品・サービスに関するドキュメントが必須です。例えば、自動車の修理工が使う分厚いサービスマニュアルや電気製品の取扱説明書などがあげられます。

グローバル企業においては、これらのドキュメントは、新車発売・新製品販売を行うのと同じタイミングに、数十ケ国語に翻訳されて配布される必要があります。この翻訳作業の効率化は大きな課題です。また、サービスマニュアルは、一般に車種ごとに個別に製作されています。しかし、よく見てみると、サービスマニュアルの内容は、平均して80%程度は車種によらず共通です。つまり、共通な部分は一つだけ作成し、車種ごとに違う部分だけ車種単位で作成し、最後にそれらを組合せることにより、きわめて効率的にサービスマニュアルが作成できます。

このように、ドキュメントの効率的な作成・保守やグローバル対応を実現するのが、XMLベースの文書アーキテクチャのDITA (Darwin Information Typing Architecture)です。DITAは、製造業におけるサービスマニュアルだけではなく、金融機関や公共分野でも使用されています。

DITAは、TopicとMapの2つの構成要素から主になります。Topicは取扱方法などが記載された内容そのものです。MapはTopicを製品ごとにどのように組み合わせるかを記載するものです。DITAでは、Topicをバージョンごとに整合性を取りながらECM製品などで管理することで常に正確なデータを入手することができます。また、製品ごとに共通となる部分はMapを使って出力することで、同じ項目の翻訳作業を複数回行うことがなくなり、迅速なマニュアルの作成・配布を実現することが可能です。

IBMではマニュアル作成の長い歴史において、2000年以降XMLベースの作成を開始しました。その結果であるDITA標準を国際標準化団体であるOASISに寄贈しています。

ドキュメント管理の方法の中には、製品間で共通となる文書コンポーネント単位に作成されていても、製品ごとに文書コンポーネントを貼ってしまうため、文書コンポーネントによってはダブって貼られます。変更時に文書コンポーネントを貼った先すべてを洗い出して貼りなおすことが必要になります。そのうちには、変更されたものと変更されていないものが混在し、収集がつかない状態になります。DITAでは、Mapによる出力定義という形式で行われているため、整合性を持った正しいデータを迅速に配布することができます。そのため、ドキュメント管理分野で急速に普及が進んでいます。